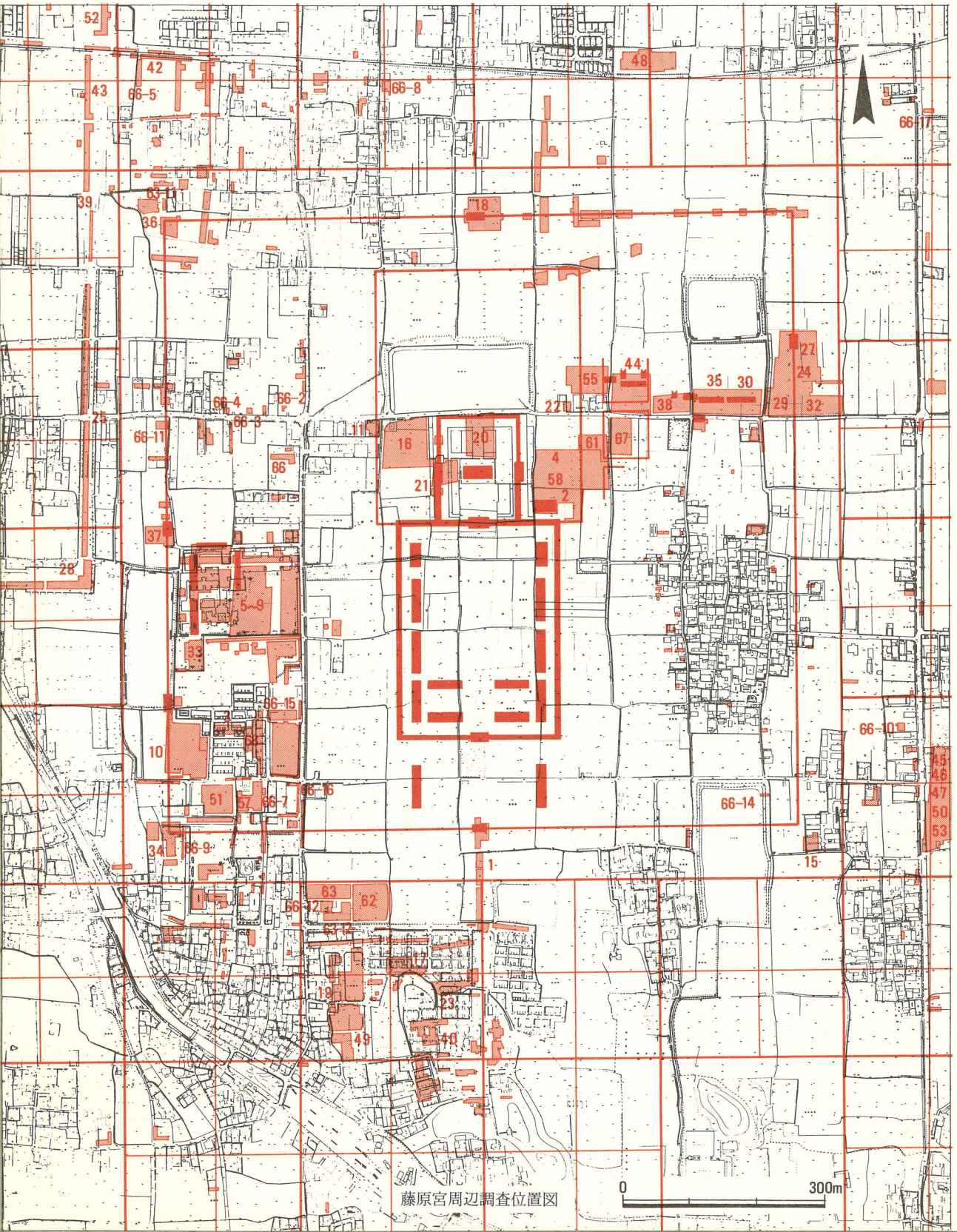


I、藤原宮の調査



1、西方官衙地区の調査

ア、第66次調査

(平成三年八月～九月)

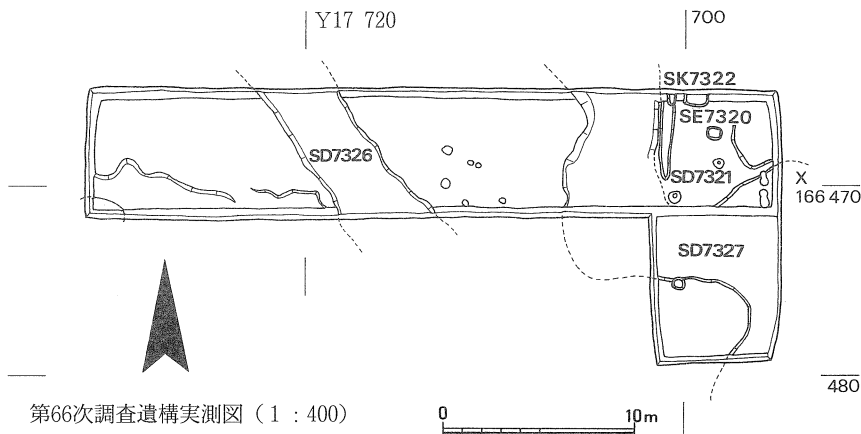
この調査は農協移転に伴う事前調査として、橿原市縄手町で行ったものである。調査地は藤原宮西方官衙にあたる。周辺地は国道165号線建設時に地下げが行われており、藤原宮期の遺構の存在があやぶまれていた。過去には同敷地内で第29～2次調査が行われている。この時は藤原宮期の遺構は確認できず、古墳時代の自然流路を検出している。今回はそのすぐ南に東西37m、南北7mの調査区を設け、一部東端を南へ拡張した。調査面積は約315㎡である。

調査区の層序は上から盛土・旧耕土・茶褐色土となり、西辺の一部では茶褐色土の上に淡緑灰色粘質土が、東辺の一部では青茶褐色細砂土（整地土）が堆積する。床土は地下げのため存在しない。遺構は現地表面下1.3mの旧耕土直下の茶褐色土・淡緑灰色粘質土・青茶褐色細砂土上面で検出した。

遺 構

検出した遺構は流路・井戸・土坑などがあり、これらは古墳時代のものと7世紀後半のものがある。

古墳時代の遺構 調査区の中央部と東部で古墳時代初頭の流路SD7326・SD7327を確認した。SD7326は南東から北西へと流れる自然流路で幅3.5m、深さ1.1mである。堆積層は褐色・灰色粗砂である。SD7327は南東から北西へと蛇



第66次調査遺構実測図（1：400）

行しながら流れる自然流路である。幅5～6m、深さ1.0mで、堆積層は黒灰色バラスである。第29－2次で検出したSD2286はSD7327の堆積層の一層であり、第29－2次調査区全域が今回検出のSD7327の中と考えられる。SD7326・SD7327からは布留式の土器が出土している。

7世紀後半の遺構 調査区の東部、SD7321以東の東西幅4mの範囲で、厚さ約0.3mの青茶褐色細砂土の整地層が存在する。この整地層上面で南北溝SD7321・井戸SE7320・土坑SK7322が検出された。SD7321は幅0.6m、深さ0.5mの南北溝で、調査区北端から4.5mで終る。埋土は青茶褐色砂質土で遺物の出土は無かった。SE7320は径1.5mの円形の井戸である。北半分は調査区外となる。深さ1.1m、堆積土は暗灰色砂質土で、飛鳥Ⅲの土器が出土した。SK7322は径0.5mの土坑で、深さは0.7m、北半分は調査区外となる。堆積土は黒褐色土・暗灰色砂質土で、重複関係からSD7321より新しい。

遺 物

今回の調査区から出土した遺物は比較的少なく、弥生時代から藤原宮期に属す。SD7326・7327からは古墳時代初頭の布留式の壺・甕・碗・高杯が出土し、SE7320からは飛鳥Ⅲの土師器杯C・甕・高杯、須恵器杯・甕が出土した。

まとめ

今回の調査の目的のひとつであった藤原宮関係の顕著な遺構は確認することができなかったが、藤原宮造営以前の様相の一端に触れることができた。古墳時代初頭の遺構として南東から北西へと流れる2条の自然流路を確認した。また、調査区の一部で7世紀後半の整地土を確認、これを切込む溝・井戸・土坑などを検出した。井戸SE7320は出土土器から井戸の存続時期を飛鳥Ⅲに限定でき、整地地業もこれに伴うものか、それ以前と考えられる。当該時期における藤原宮地域の開発が注目される。

1、第66－2・3・4次調査

(平成三年四月)

これらの調査は、住宅新築ならびに駐車場造成に伴う事前調査として、榎原

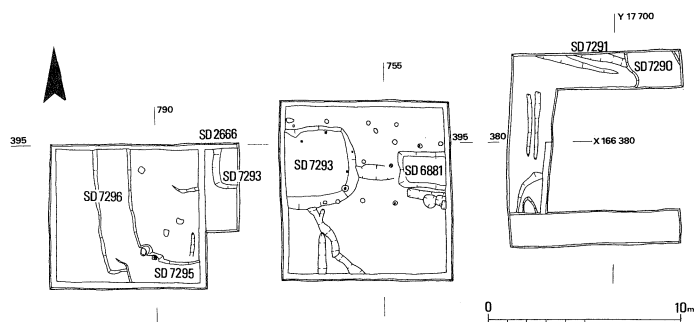
市縄手町において相次いで行ったものである。調査地は醍醐池の西方で藤原宮西北部にあたる。周辺では過去十数回の調査を行っているが、概して後世の削平が著しく、第58－11次調査において宮内先行条坊の四条々間路と西二坊々間路の交差点を検出した（『概報19』）以外、宮にかかわる顕著な遺構は検出されていない。ただ、第27－6次調査及び第63－2次調査において14世紀頃の集落に伴う環濠らしき溝が見つかっており、今回の調査は藤原宮期の遺構の遺存状況の確認と共に、環濠で囲まれた範囲を押えることを主眼とした。その結果、やはり藤原宮期の遺構は全く検出できなかったが、二重の環濠を巡らした方形区画の規模が判明したので、調査次数は異なるがまとめて報告する。

遺 構

第66－2次調査は2m×9mの東西トレンチ2本を、6mの間隔をあけて設定した。南トレンチは従来から知られている沼状地形にあたり、湧水が著しいため調査を断念した。北トレンチでは、床土直下の暗茶褐色粘質土面で自然流路と思われる南北溝SD7290と、これに注ぐ東西溝SD7291を検出したので、両トレンチ間を幅2mで結んだ。その結果、南トレンチのすぐ北から東南方向に沼状地形SK7292が広がることが判明した。SD7290はここに流れ込むのであろう。

第66－3次調査は東西9m、南北9.5mの調査区を設定して行った。基本的な層序は耕土・暗灰茶色砂質土・黄褐色粘質土・灰黒褐色砂質土（地山）の順で、暗灰茶色砂質土面で環濠の一部であるSD6881・SD7293と数個の円形小柱穴群SX7294等を検出した。SD6881は前年東隣で行った第63－2次調査で検出していた溝の西延長部に当り、調査区中央で一旦途切れる。幅約2m、深さ0.25cmで、埋土は2層に分かれる。

前回は無遺物のため年代を決められなかったが、今回14世紀の土器が出土したため、環濠の一部とみて間違いない。SD7293はSD6881の



第66－2・3・4次調査遺構実測図（1：400）

西端から2.2m隔てて始まり、西へ伸びる溝状遺構である。幅4.4m、深さ0.75m程の大規模なもので、埋土は2層に分かれる。SD6881・SD7293の周辺には数個の円形の小型柱穴があり、半数には柱根が残る。建物として明確にまとまらないが、溝が途切れる鞍部に当たるため門が存在した可能性は残る。

第66－4次調査は当初東西8.3m×南北7.7mの範囲で開始し、後に東へ1.7m×3.7m拡張した。基本層序は耕土・床土・灰褐色砂質土・暗灰茶色砂質土・灰黒褐色砂質土（地山）の順で、遺構を検出したのは暗灰茶色砂質土面である。調査区はほぼ中央を北から東にL字形に曲る溝SD7295・SD7296は幅2.0m、深さ0.4mで、埋土は層に分かれる。その東4.3m、北4.0mの位置（拡張区）で、平行してやはりL字形に曲る溝の一部を検出した。これは第66－3次調査のSD7293、第27－6次調査のSD2666それぞれの延長線上にあり、両者が合する部位にあたる。幅は不明、深さ30cm、堆積土は上下の2層に分かれる。

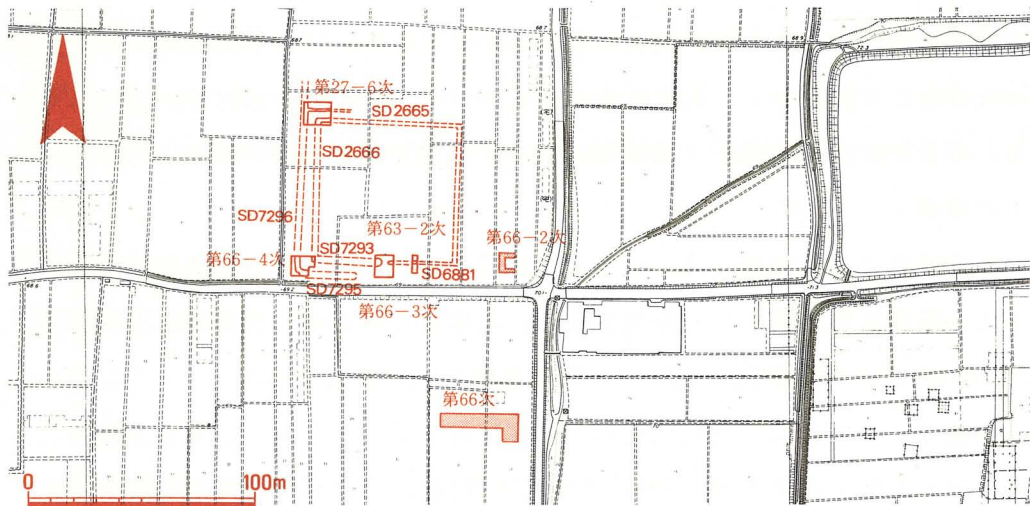
まとめ

今回の調査と第27－6次・第63－2次調査の成果を総合すると、二重の環濠を巡らせた正方形の区画が復原できる。第27－6次調査の直角に折れ曲がる溝SD2665・2666が内濠の西北隅にあたり、SD2665の北肩から今回検出した西南隅にあたるSD7293の南肩までの距離は約65mである。一方、SD7293の西肩から第66－3次で検出したSD7293東端とSD6881西端のとぎれ部の中心までの距離は32m強を測り、両溝間の鞍部を中央入口と見てここを中軸線として東に折り返せば外寸で方65mの区画が想定できる。また、第27－6次の調査でもSD2665・2671、SD2666・2675双方の溝肩間が約4.3m、4.5mとほぼ等しかったことから、この空間地を通路とみなす可能性を指摘していたが、西南隅の第66－4次でも同様に西へ約4.3m、南へ約4.1m隔てて直角に折れ曲がる溝SD7296・7295を検出し、これらが外濠であることが確実にになった。外濠で囲まれた区画の規模は東西・南北共外寸で76mとなる。なお、内濠・外濠間の空間地に土塁あるいは築地塀のような施設があったか否かは判らない。また、西辺の外濠SD2675は北方へと抜けている。排水のためであろう。

区画が正方形で、環濠が二重に巡る点は、通常の中世環濠集落のあり方とは

様相を異にする。むしろ土豪層の居館のような施設を想定すべきであろう。

出土遺物には大量の土器類のほか若干の瓦類があり、軒丸瓦6275型式1点、軒平瓦6641F型式1点がSD7293から出土している。土器類は主として2本の濠から出土し、14世紀代を主体に若干13世紀代のものを混える。



環濠区画復原図

ウ、第68次調査東区

(平成三年九月～十一月)

この調査は、近年継続して行なわれている橿原市四分町での市営団地建て替え工事に伴う事前調査として実施したものである。調査地は藤原宮西方官衙地域に当る。当地域では、これまでの調査において、藤原宮に関わる南北に長い建物群（第5～9次調査）、小規模な掘立柱建物や堀（第3・26・51次調査）、あるいは藤原宮に先行する六条々間路・西二坊々間路（第51・54・15・57・59次調査）などを検出している。また当地の周辺には弥生時代の集落遺跡である四分遺跡がひろがり、今回の調査区に東接した位置で行った第59次調査では掘立柱建物や掘立柱堀・井戸など藤原宮期の遺構を検出するとともに、その下層で弥生時代後期の水田遺構を確認している。従って本調査においては、西方官衙地域における藤原宮期の土地利用の状況、及びその下層における弥生時代の水

田跡の西方へのひろがりを確認することを主な目的とした。

なお今年度実施した第68次調査は、東区と西区に分けて行った。そのうち本概報では東区の調査について報告し、西区については次年度の概報に収録することとする。

東区における調査は排土の置場の関係から、まず調査地の北半を調査し、次に南半に及ぶこととした。調査面積は1010㎡である。なお下層遺構の調査は第59次調査との関連から、調査区南半に東西14m、南北11mの調査区を設けて行った。以下では上層遺構と下層遺構に分けて調査の概要を述べる。

上層遺構

本調査区における層序は、上から、現代の盛土・耕作土（暗灰色粘質土）・床土（暗青灰色粘質土）・淡褐色土で、遺構はこれらの土を排除した現地表下0.7mの深さにある淡黄灰色微砂・灰褐色礫の上面で検出した。

検出した遺構には、掘立柱建物・掘立柱塀・井戸・土坑・溝などがあり、これらはおおむね古墳時代・7世紀前半代・7世紀後半及び藤原宮期に属する。

古墳時代の遺構 この時期に属する遺構には、井戸2基、溝4条、土坑1基などがある。

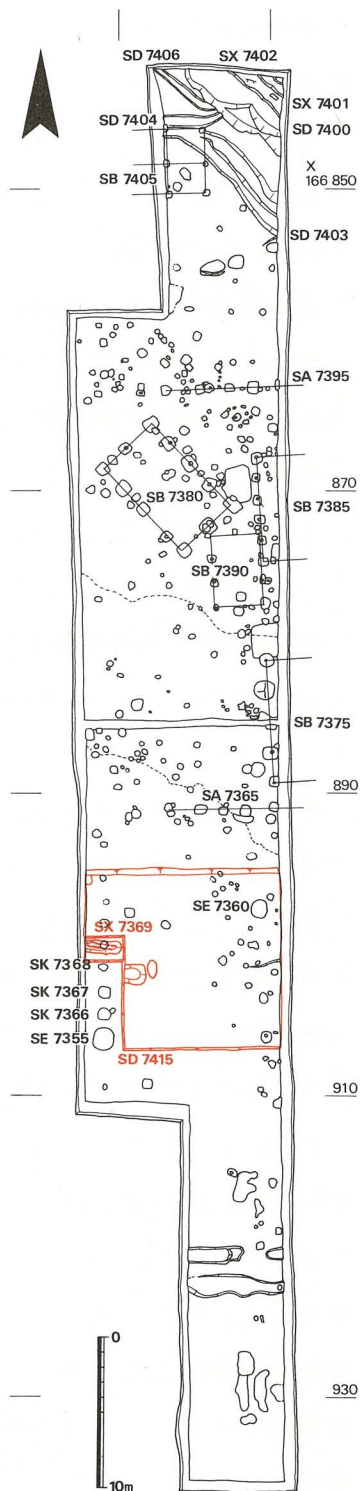
2基の井戸はいずれも調査区南半で検出した。SE7360は東辺に位置し、1辺1.2mの隅丸方形を呈する素掘の井戸で、深さは0.8mである。また西辺で検出したSE7355は、深さ1.1mの素掘の井戸で、1辺1.4mの隅丸方形を呈する。SE7360とSE7355からはともに5世紀後半に属する土器が出土した。

調査区北端付近ではSD7400・7403・7404・7406の4条の溝を検出した。SD7400は調査区の北端で検出した斜行する大溝である。調査区内では南岸のみを検出し、北岸を確認していないために溝の規模は明かではないが、現状で幅は5.5m以上、深さは1.8mある。堆積土は大きく3層に分けられるが、最上層（炭混暗灰褐色砂質土）はこの溝を含め調査区北端部全体を埋めた埋土である。この層からは飛鳥Ⅰ及び飛鳥Ⅳ・Ⅴの土器が出土した。溝の本来の堆積層は2層からなり、上層は灰色微砂・黄灰色粗砂・淡灰色粘砂が互層になる砂質土層で、下層は灰褐色粗砂である。上層からは5世紀後半から6世紀後半の土器が出土し

たのに対して、下層には須恵器が含まれておらず、4世紀末から5世紀初頭の土器が出土する。SD7400の中央部には流れに沿うように木組施設SX7401・7402が設けられている。ともに溝の底を幅数十cmで掘り窪めて流れに沿って置いた木組の施設で、その周囲に粘土・粘質土を貼って固めている。SX7401は、掘り窪めた底に小石を置き、その上に板を立てて粘土を貼ってそれを支え、さらにその上に底板を置いて側板を立て、側板の内外を粘土で貼り固めるとともに所々を杭で止めている。またSX7402の木組は机を転用したもので、天板を北に向けて寝かしている。SX7401・7402ともに機能は明かではない。なおこれらは裏込や内部の堆積土から出土した遺物が4世紀末から5世紀初頭のものであることから、SD7400の下層の堆積土に対応する時期に設けられたものである。

SD7404は幅0.8m、深さ0.5mの素掘の東西溝で、断面はU字形を呈する。SD7404はSD7400から水を引くための溝であると考えられる。またSD7403は1.2m、深さ0.3mの素掘の溝で、SD7400にほぼ並行して流れる。SD7404・7403はいずれもSD7400の上層と同時期の土器を出土するが、重複関係からSD7403がSD7404より古い。

SD7406は北で西に45° 振れる素掘の溝で、断面U字形を呈する。幅は0.5m、深さは0.4mである。出土した土器は少ないが、須恵器を含まずほぼ4世紀末から5世紀初頭のものに限定されること



第68次調査東区遺構実測図 (1 : 500)

Y 17 750

740

や重複関係から、SD7400の最下層の堆積に並行する時期の溝である。恐らくSD7404と同様にSD7400から水を引く機能を果たしていたと推定される。

井戸SE7355の北で土坑SK7668を検出した。楕円形で、深さ7cmの浅い土坑である。SK7668からは古墳時代の土器が出土した。

7世紀前半代の遺構 この時期に属する遺構には、掘立柱建物1棟がある。

調査区中央北寄りで検出したSB7380は、桁行4間、梁間2間の掘立柱建物で、北で西に45°振れる。この振れは、上述した古墳時代の2条の溝SD7400・7404の振れや、第59次調査で検出した弥生時代後期の水田遺構の畦畔方向ともほぼ合致する。このことは弥生時代から7世紀前半までの長期に互り地形に制約された土地利用が行われたことを示している。柱間寸法は、桁行が1.8m、梁行が1.9mである。

7世紀後半から藤原宮期の遺構 この時期に属する遺構には、掘立柱建物4棟、掘立柱塀2条、土坑3基等がある。掘立柱建物・掘立柱塀ともわずかに北で西に振れている。

調査区の東辺中央で検出したSB7375は南北棟掘立柱建物で、その西側柱列4間分を検出した。柱間寸法は2.1m等間で、いずれも柱穴には長さ50～70cmの柱根を残す。両端と北から3番目の3個の柱穴には柱の下に礎盤（南端は石で、他は木材）を置く。SB7375の北3.7mにはSB7375の西側柱と柱筋を合わせたSB7385がある。SB7385も南北棟掘立柱建物で、その西側柱列7間分を検出した。柱間寸法は1.4m等間である。北端の柱穴には柱根が残り、その下には礎盤の石が置かれていた。SB7385と重複関係があり、それより新しいSB7390は、桁行3間、梁間2間の南北棟建物で、柱間寸法は桁行が1.8m等間、梁行が1.7m等間である。SB7375の南1.5mには掘立柱東西塀SA7365があり、調査区内で4間分を検出した。柱間寸法は1.5m等間である。またSB7385の北には4.5mを隔てて掘立柱東西塀SA7395があり、調査区内で6間分の柱穴を確認した。柱間寸法は1.8m等間である。さらに調査区の北辺に位置する総柱建物SB7405は、南北2間、東西1間以上で、柱間寸法は南北が2.0m等間、東西が2.4mである。

3基の土坑SK7366・7367・7368は古墳時代の井戸SE7355の北で南北に並んで

検出された。いずれも隅丸方形を呈する深さ0.1m程度の浅い土坑である。これらの土坑からは7世紀代あるいは飛鳥Ⅳの土器が出土した。当初SK7368も含めて一連の柱穴で、掘立柱建物となると考えていた。しかし断ち割り調査の結果いずれも浅く、柱の痕跡や抜取りを認めることができず、また出土した遺物からSK7368だけ時期の古いことが明かとなり、並んで掘られた土坑であると考えに至った。

なお第59次調査で調査区の西辺において検出し、さらに西方へ延びることが推定されていた3棟の掘立柱建物と1条の掘立柱塀については、その延長を本調査区内で検出することはできなかった。従ってこれらの遺構はいずれも第59次調査区と本調査区との間において完結するものと推定される。また逆に本調査区において検出し、東へ延びることが推定された遺構についてもその延長を第59次調査区において検出していないことから、これらの遺構も両調査区に挟まれた未調査地において完結するものと思われる。

下層遺構

下層遺構の調査は、調査区南半の東壁面における土層の観察及び平面における遺構の検出の両面から行ったが、いずれにおいても水田の遺構を確認することはできなかった。

基本的層序は、上から順に微砂（淡茶灰褐色微砂・淡黄灰褐色微砂）・粘質土（淡灰褐色粘質土）・微砂（淡黄色微砂・淡黄褐色微砂）で、遺構面である粘土（黒灰褐色粘土・黒灰色粘土）に至る。

検出した主な遺構には、溝状遺構SX7369と東西溝SD7415がある。SX7369は下層遺構掘り下げ途中で検出したもので、検出面は淡灰褐色粘質土である。幅0.9m、深さ0.3mで、調査区内で2.2m分を確認した。掘り込みの内部には自然木が埋まり、それを封ずるように上を黄灰色微砂が覆っていた。機能・性格は明かではない。また東西溝SD7415は上層で検出したSE7355の壁面及び底面において確認した、ほぼ東西に流れる溝である。SD7415からは弥生時代中期の土器が出土した。

出土遺物

出土した遺物には土製品・木製品・石製品・金属製品がある。古墳時代の土師器・須恵器が大半を占め、7世紀から8世紀の遺物は少ない。注目されるものとしては、7世紀から8世紀のものと考えられる蹄脚硯・円面硯、古墳時代の碧玉製管玉・滑石製双孔円盤などがある。

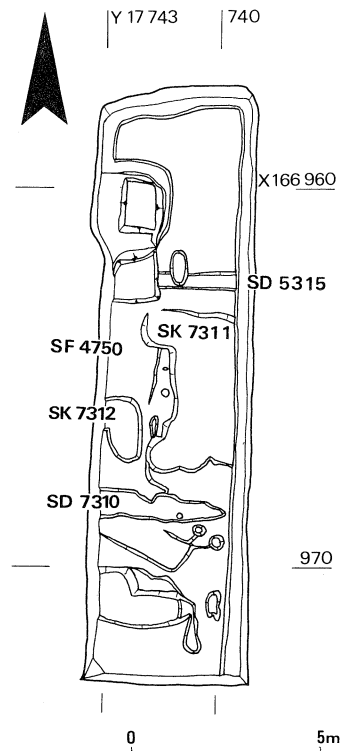
まとめ

今回の調査においては、古墳時代、7世紀前半代、7世紀後半から藤原宮期の建物・堀・井戸・溝等を検出し、今回の調査区においてもこれまで周辺で行われた藤原宮西方官衙地域の調査成果とほぼ同じ状況であることを確認した。また7世紀前半代の遺構の方位が弥生時代後期の水田の畦畔や古墳時代の溝の方位とほぼ一致していることが確認され、7世紀前半代まで長期に亘って自然地形に制約された土地利用が行われたことも明かとなった。一方本調査区に東接する位置で行われた第59次調査で検出された弥生後期の水田遺構は今回の調査区では確認できなかった。第59次調査区では黒色粘土の直上に堆積していた褐色シルト層の存在を手がかりとして水田跡の検出を行い得たが、今回の調査区ではこの土層が認められず、このことが水田遺構を検出できなかった要因である。また水田と住居を区画するような溝等の施設も検出しておらず、第59次調査で検出した水田の西への広がりについては不明である。

エ、第66—7次調査

(平成三年八月)

この調査は、道路建設に伴う事前調査として、橿原市四分町で実施したもので、調査地は藤原宮の西南辺にあたる。周辺ではこれまで数次の調査が行なわれ、特に本調査地に西接する位置で昭和六十二年には第57次調査が実施され、藤原宮に先行する条坊道路である西二坊々間路が検出された。今回の調査



第66—7次調査遺構実測図
(1:200)

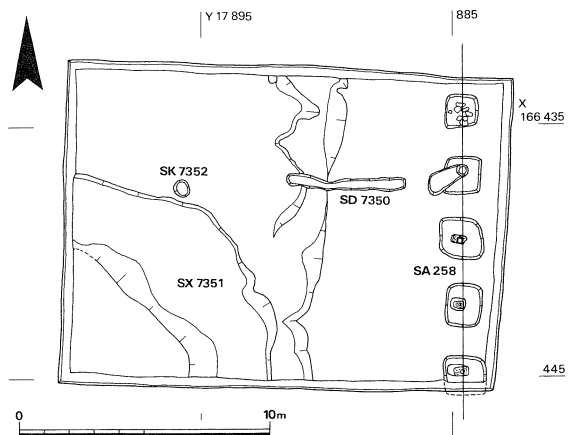
はその東延長を確認するために実施した。調査面積は60㎡である。

盛土・耕土・黄灰粘質土・黄灰褐砂質土・灰褐微砂を排除して遺構面に達する。検出した主な遺構は東西溝2条と土坑2基である。二条の東西溝はともに浅い素掘で、SD5315は幅0.5m、深さ0.2m、SD7310は幅0.8m、深0.2mである。このうちSD5315は第57次調査で検出した西二坊々間路SF4750北側溝の東延長上に位置するが、その南11mに位置するSD7310は南側溝の延長上にはない。従ってSD7310は西二坊々間路の南側溝ではなく、本調査区内では南側溝は削平されてしまったと考えられる。SK7311は深さ0.2mの浅い不整形の土坑で、またSK7312は深さ0.1m程の長円形の土坑である。いずれも時期は明らかはない。

2、西面大垣の調査（第66－11次）

（平成三年十一月～十二月）

この調査は、橿原市縄手町における個人住宅新築に伴う事前調査である。調査地は昭和五十四年の第23－5次調査地の北にあたり、調査区の東端に藤原宮西面大垣SA258、その西9mに南北溝SD2375、調査区西端から西の水田に外濠SD260が想定された。調査地は湿潤な水田で、基本的な層序は上から水田耕作土・床土・青灰色粘土・暗褐色砂質土（地山）である。調査地の東端では表土下約40cmで地山の暗褐色砂質土となり、その上面で大垣SA258を検出したが、地山は大垣の西3mあたりから西へ向かって大きく下降し、その上に灰色微砂粘土や青灰色砂質土が厚く堆積する。また、大垣の西8mあたりから西では、青灰色砂質土もやや大きく下降して、木質物を含む暗灰色粘土層や暗灰色砂層となる。これらは西外濠の最終堆積層にあたるもので、調査区の西



第66－11次調査遺構実測図（1：300）

端では、暗灰色粘土が急激に下降する状況で西外濠に至る。

遺構 検出した主な遺構には西面大垣SA258がある。第23－5次調査の南北溝SD2375は検出されなかった。

西面大垣SA258は、一辺1.5～1.8mの大型掘方をもつ南北堀で、5間分を検出した。柱穴の遺存状況は極めて悪く、柱掘方が深さ約0.3～0.4m残るだけで、その中央部西寄りに柱拔取り穴の最下部が柱痕跡状に確認された。柱拔取り穴の東面は半円形をなしていて、柱の最下部の痕跡と理解されることから、柱の直径が約0.3mで、柱間は2.6m等間であることがわかる。北端の柱穴では柱位置の底に大きな川原石を据えて、その周囲に同様の川原石を詰め込んでいる。他の柱穴の底には礎盤が据えられている。礎盤は長さ約50cmに切った筏穴のある丸太材を2つから3つに縦割りしたもので、南端の柱穴では別に半裁した丸太の薄い断片が敷いてあった。これらは柱の不同沈下を防ぐためと考えられる。

遺物 遺物には土器・瓦類がある。土器は西外濠の最終堆積層などから土師器・須恵器・黒色土器・瓦器のほか灰釉陶器が少量出土し、瓦類には藤原宮式軒丸瓦6275D・軒平瓦6641Cのほか丸・平瓦が少量ある。

まとめ 西面大垣に関しては、これまでに昭和四十三年の県教育委員会の調査、第23－5次・西面中門・西面南門・西南隅の調査の多くの地点で確認してきた。今回の調査では、大垣の柱の礎盤の存在とその構造を確認した。西外濠については、第23－5次調査で藤原宮の廃絶後も周辺地の基幹用水路として中世まで機能し続けたことが明らかになっており、今回も直接に西外濠を検出したわけではないが、その最終堆積層にあたる砂・有機物層を確認し、中世には浅いが幅広い水路となっており、この水路のために藤原宮期の南北溝が流失していることを確認した。この最終堆積層に関しては、第23－5次調査では青灰色粘土層で覆われた後、自然河川状をなしたものと理解してきた。今回の調査では、瓦器を含む粘質土層や有機物層がその上で確認され、瓦器の時期にまでも基幹水路として機能していたことが認められた。

3、南面大垣の調査（第66－9次）

（平成三年九月）

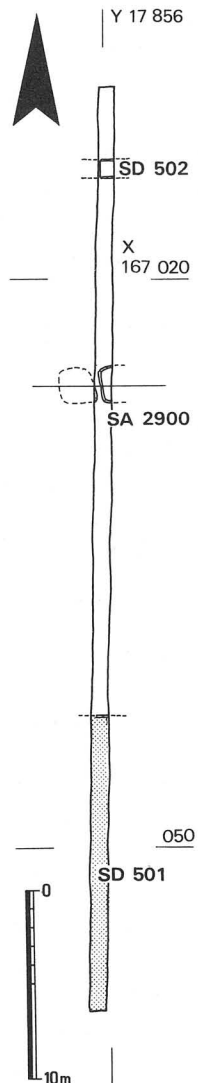
この調査は下水道埋設工事に伴う事前調査として、橿原市飛騨町で行ったものである。調査地は藤原宮西南隅の整備地にはさまれた南北道路で、南面大垣を南北に横断する位置にあり、第34次調査（『概報12』）の東隣にあたる。調査区は南北49m・東西0.8mの約40㎡である。

調査地の層序は上から盛土・茶灰色砂質土・淡茶灰色細砂土・黒褐色土で、遺構検出は現地表面下1.5mの黒褐色土（弥生時代後期の包含層）上面で行った。検出した遺構には南面内濠・大垣・外濠のほか東西・南北の小溝がある。

南面内濠SD502は幅1mで、堆積土は黒褐色土混じりの灰茶色土で、瓦・土器が少量出土した。

南面大垣SA2900は2個の柱穴を検出した。これらはそれぞれ西南隅の柱穴から9・10番目にあたる。東の柱穴は南北1.8m、東西は調査区外に出るが0.5mまで確認できた。隅丸方形を呈すると思われる大形の柱掘方である。埋土は黒褐色土ブロック混じりの淡茶灰色土である。西の柱穴は西壁で確認したもので、南北1.2mまで確認した。埋土は東の柱穴と同様である。南面外濠SD501は幅15m以上を検出したが、さらに南へ広がる。第34次調査地を考慮すると、今回検出した溝は外濠本体ではなく最上層の部分と思われる。堆積土は最上層が灰色粘土・茶褐色土である。

以上のように、幅0.8mと極めて狭い調査区であったが、藤原宮の南面内濠・大垣・外濠を検出し、これまでの成果を追認した。



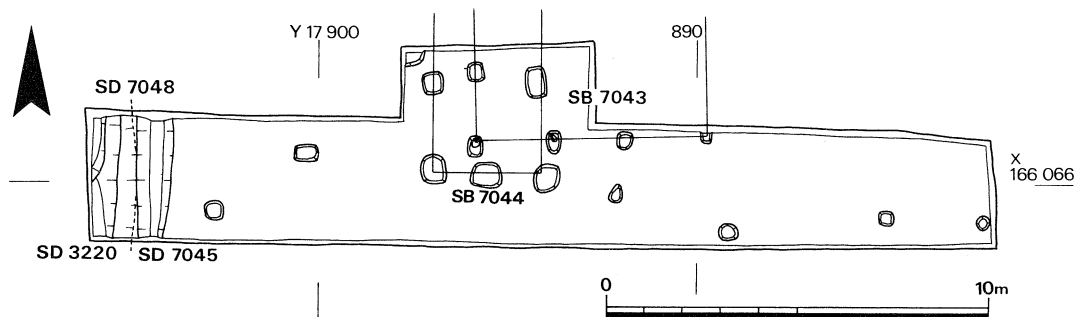
第66－9次調査遺構実測図（1：400）

4、宮外周帯の調査（第63－11次）

（平成三年一月）

この調査は資材置場建設に伴う事前調査として、樫原市醍醐町で行ったものである。調査地は藤原宮西北隅の二条大路と外濠にはさまれた外周帯にあたり、周辺の調査としては南に第36次（『概報14』）、東に第54－22次（『概報19』）、北には第58－14・15次（『概報19』）、北西に第63－1次（『概報21』）等がある。調査区は東西24m・南北3mを設定、後に一部北へ拡張した。調査面積は82㎡である。調査地の層序は、上から黒灰色粘質土（耕土）・青灰色粘質土・灰褐色砂質土（床土）・暗灰褐色砂質土（包含層）・茶褐色粘質土があり、遺構は現地表面下0.4mの茶褐色粘質土面で検出した。検出した遺構は、建物・溝のほか、南北・東西方向の小溝がある。

建物SB7043は東西3間、南北2間以上の建物で柱穴は0.5m 規模、柱間は東西7尺、南北7尺である。一部の柱穴には石が入り、柱穴から10世紀以前の黒色土器が出土している。建物SB7044は東西2間、南北2間以上の南北棟建物で、柱穴は一辺0.7m略方形を呈する。柱間は梁行6尺、桁行8尺、遺物の出土は無かったが、藤原宮以前の7世紀代と考えられる。南北溝SD7045は幅0.5m、深さ0.15mで暗灰緑色砂質土が堆積し、11世紀の瓦器が出土している。南北溝SD3220は幅0.9m以上、深さ0.5mで、包含層の上面から切込む。暗灰緑色粘質土の堆積土から11～12世紀の瓦器が出土している。南北溝SD7048は幅1.3m以上、深さ0.5mである。SD3220の下層で検出したもので、西肩は調査区外となる。堆積土は灰褐色砂質土で、土師器・須恵器が出土している。



第63－11次調査遺構実測図（1：200）